

Title	日本のものづくりに関する一考察：実際の企業を事例として
Sub Title	
Author	ヤング, 千帆佳(Young, Chihoka) 河野, 宏和(Kōno, Hirokazu)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2017
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2017年度経営学 第3342号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002017-3342

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（ 2017 年度）

論文題名

日本のものづくりに関する一考察
－実際の企業を事例として－

主 査	河野 宏和 教授
副 査	坂爪 裕 教授
副 査	市来寄 治 専任講師
副 査	

氏 名	ヤング 千帆佳
-----	---------

論文要旨

所属ゼミ	河野 研究会	氏名	ヤング 千帆佳
(論文題名)			
日本のものづくりに関する一考察 ー実際の企業を事例としてー			
(内容の要旨)			
近年、日本の製造業の企業数は毎年減少傾向にあり、こうした減少の中には経営者の高齢化といった事由だけでなく、外部環境の不透明さによる先行き不安などから成長を諦め、自ら廃業の道を選ぶ企業も少なからず含まれていると考えられ、このような事態は国内ものづくりの弱体化に繋がる可能性がある。他方、先行きの見通しが難しい状況下で、限られた経営資源を生かしながら成長している企業もある。このような企業を先進事例として、前述のような理由から成長を諦めかけている製造企業に、実務的に有用な提言を示すことが本研究の目的である。 本研究では、できる限り現場視点に立つという方針の下、事例研究を通して、成長を続けている企業が大切にしているポリシーやこれまで行ってきた取り組みを「成長のカギ」として抽出し、その上でポリシーや施策の因果関係を考察する。次に、成長することを諦めかけている製造企業に向けて、先に明らかにした企業の「成長のカギ」を基に提言を導出する。 はじめに、「成長のカギ」を導出するため、国内で成長している7社を選定し、文献調査ならびに現場見学・インタビューによるフィールド調査を行った。その結果、各社の成長に寄与する独自の取り組みや活動を進める上での考え方が明らかになったが、同時に、「体系化された取り組みだけが成長に不可欠なのではなく、その背景に別の何かが作用しているのではないか」との思いが生まれた。そこで研究対象を3社に絞り、各社の成長の因果関係を詳細に分析した。前述の文献・フィールド調査の結果を基に因果関係図を作成し、作成過程で因果関係が不明瞭な箇所や更なる疑問が発生した場合には、追加フィールド調査を実施して疑問点を解明しつつ因果関係図を修正した。 その結果、各社の「成長のカギ」に作用している2つの重要な要素として、「現場での体験・経験とその積み重ね」ならびに「活動を進める上での明確な方向性の存在」が共通して存在していることが明らかになった。どの企業でも、ゼロから成長のための改善や改革の活動をスタートさせ、時間経過の中で試行錯誤して現場での体験・経験を繰り返し、徐々にそれらの活動が体系化されたものになるまで磨き上げられている。更に、3社ともに、従業員が活動に参画する上で方向性をきちんと理解して取り組んでおり、都度その方向性に立ち返って活動を進めている。こうした方向性が全員活動の向かうべき方向に結びついていると考えられる。 以上の成果から、ものづくりの現場でできることは未だ沢山あると考え、「成長を諦めかけている製造企業」に対し2つのことを提言している。一つは、「何でも良いからとにかく現場で実践すること」である。製造企業が成長できるチャンスは現場にしか眠っておらず、現場での小さい気付きの体験から「自社流」の活動に向けた積み重ねを始めることが重要である。二つ目は、リーダー自らが先頭に立ち、活動の方向性を示すことである。活動の推進途上でメンバーが道に迷うことが無いよう、リーダーが活動の基本方針や目標を示し、立ち返ることができる場所に光を照らすことが求められている。			